

大阪登文会との交流を通じて

愛知登文会 会長 長谷川良夫、同 事務局 井澤 知旦

はじめに

愛知登文会（正式名称は愛知県国登録有形文化財建造物所有者の会）が平成23年6月に設立されました。まだ、半年程度しか経っていません。大阪登文会（正式名称は「大阪府登録文化財所有者の会」）は平成17年9月に全国初の登録文化財の組織として愛知登文会より6年も早く設立され、“ドッグイヤー”なら、幼児と壮年ほどの違いがあります。先行者の取組みを見聞して、私たちの活動に活かすべく総勢8名で訪問させていただきました。畠田耕一会長、寺田信正副会長、寺西興一事務局長に対応していただき、大阪登文会の取組みと同時に、「阿倍野長屋・寺西家住宅」（阿倍野区）および「畠田家住宅」（羽曳野市）を見学させていただきました。そのなかで学んだことを下記に記します。

住民の理解と支持

第一に建造物の保存・活用は、講演会型から見学会等を含む文化財建造物と融合したフォーラム・イベントのような施設活用型へと転換するとともに、情報発信に力を入れ、建造物の存在を周知しながら多くの理解者・支援者を拡大していることです。畠田家住宅活用保存会では賛同者350人以上を会員として組織化され、一般公開・フォーラムや畠田塾を通じてこども達と親に文化財建造物を見て学ぶ場を提供しています。阿倍野長屋も飲食店として、多くの人々が来店することで登録文化財長屋の存在を周知することになります。また1万人以上が集まる「どっぷり昭和町」という手づくりイベントを開催しています。都市（街並み）や建築を保存していくためには、①利用されていること、②清潔であること（管理されていること）、③価値が見えていることの三原則が重要だと東京芸大名誉教授の前野まさる氏は提唱していますが、その実践版でもあります。

保存コストの捻出

第二はまさに文化財建造物を保存し、次代に継承していくために苦労をされていることです。阿倍野長屋は地下鉄の昭和町駅から歩いてすぐという好立地条件で、飲食店やマンションの需要がある場所です。長屋改修型飲食店とマンション建設の収益比較をすると、前者の方が、投資コストが1ケタも少ないうえに、収益性が2倍もあることから、長屋が取り壊されることなく存続しています。寺西家住宅は現在も住まいとして利用されています。日常的に利用されていない文化財建造物の保存コスト（維持管理費）が問題になります。このコストをどう生み出すのかが存続の要であると考えました。今後は、所有者が高齢化していくなかで相続が発生したり、空家化したりすることで、消滅するリスクも高まりそうです。

大阪登文会の活動と運営

大阪登文会は登録件数が多くなるにつれて会員の人数も増加しています。会の活動の目標を「登録文化財の活用と情報発信を通じた普及啓発と市民の文化的資質の向上」に置き、会費収入で運営されていますが、必要に応じて助成金を得て事業を実施しています。会は会員が情報を持ち合い、共有する場であり（プラットフォーム）、また会員の保存活用活動の支援の場（サポート）であります。優れたリーダのもとで活動を展開されていることを感じ、とくに後者については役員等スタッフの人選（例えば建築士）が重要であると考えました。

これから

愛知登文会では本年度は3つのプロジェクト、すなわち、①文化財所有者プロジェクト（保存活用に向けた意識改革・取組み促進と地域住民への情報発信）、②こども文化財体験プロジェクト（こどものころから文化財に親しむ）、③観光ボランティアガイド連携プロジェクト（ガイドの学習支援と来訪者

への周知)を文化庁の支援を得ながら取組んでいます。今後、大阪登文会との交流を深め、刺激を受けながらより活動を充実していきたいと考えております。大阪登文会の力量を感じた見学会でした。有難うございました。今後ともよろしくお願ひいたします。(2011.12.31記)



阿倍野長屋。4つに区切られているが、現在は3つの飲食店が営業している。AKA(中華)、SHIRO(和)、混(フレンチ)は味のトリコロール。すべて埋まればマンション経営より収益性は高い。



寺西家住宅の外観。埠になつかしき昭和の写真を貼ってまちかど写真展を実施。



畠田家住宅の三つの屋根が雁行状に並ぶさまは壮観。瓦の重なり幅も広く重厚感を醸し出す。むくりの屋根はアクセントになっている。



畠田家住宅にて記念撮影